科学館の
コレクション
119

電気アイロン

資料登録番号
2006-23

電気アイロンは、服のシワを伸ばすのに便利な家電として、日々の生活の中で親しまれています。熱と圧力を利用して衣類などのシワを伸ばす技術は古くからあったようで、日本でも熱したコテや、取っ手の付いた金属容器に熱した炭を入れたものを使っていたそうです。

電気アイロンが家庭にやってきたのは20世紀前半のことで、1915(大正4)年に、東芝が初の国産電気アイロンを販売しています。原理的には、ニクロム線に電流を流した時に生じる熱(ジュール熱)で金属をあたためて使うという簡単な構造でしたから、家電製品の中では価格も比較的手ごろでした。そのため短い期間で普及し、統計によると1937(昭和12)年における国内での普及台数は約313万台でした。

写真1:ナショナル製アイロン

電気アイロンが進化したのは1950年代以降のことで、1954(昭和29)年に水を熱して蒸気を発生させるスチームアイロンが、そして1959(昭和34)年には過熱防止や温度を調節できるサーモスタットを内蔵したアイロンが登場しました。特にサーモスタットは、膨張率の異なる2つの金属を貼り合わせた「バイメタル」が使われていて、一定の温度に達すると形を変えることによりスイッチを切ります。そして一定以下に温度が下がると、再び金属の形が戻ってスイッチを入れるのです。この調節機能により、電流を流し続けて加熱しすぎるトラブルから解放され、さらには使用する繊維に適した温度に調節することもでき、安心して使えるようになりました。そして近年では、アイロンはコードレス化や、スチーム機能の高性能化など、さらに進化しています。

さて、科学館にはいくつかアイロンが所蔵されていますが、写真の資料はナショナル製で、詳しい製造年代は不明です。まだサーモスタットによる温度調整機能はないことや、持ち手の素材がベークライトのようであることから、1950年代前半に製造されたものと思われ、家庭用電気アイロンの変遷を見る上で興味深い製品です。

嘉数　次人(科学館学芸員)